

“まちの宝”を発信するステーション

広瀬之宏 —— *HIROSE-Yukihiko*

「まちの記憶と未来」京都映像アワード 代表
京都国際インディーズ映画祭 代表
京都メディア・アート・ラボ 代表

2007 年、第一回・京都国際インディーズ映画祭の開催から 6 年。私たちは世界の短編映画を上映し、映像に込められた世界のメッセージを届けてきました。その間、たった数年で急速に発展したネット環境は、日々の私たちの生活様式も価値観も変えてしまいました。

急速に進化するネット社会においては、もはや地域とか世界といった区分けも境界もなくなっているのです。大空を飛ばたく白鳥や大洋を移動するクジラたちのように、ネット情報は、自由に地球を駆けめぐっています。そこには人間の作った国境なんてありません。あるのは一つの地球だけ。言葉や文化、宗教の違いなど民族の結界を越えて、地球の何処にいても、誰もがつながり共有できる。これが今始まった新しい世界です。

しかしながら、それと引き換えに、置き去りにされた過去の生活価値を取り戻す動きも活発になってきています。

いま日本では、バブル崩壊後、高齢化と少子化にともない限界集落がその裾野を拡げています。いままで栄えてきた産業や文化も危機に瀕しています。地域力を向上させる為に、地域情報の発信力を高めていくことと、住民自身が自らの地域の伝統や特徴を見直す必要があることが課題として挙げられます。こうした課題を解決するためには、地域がもつ資源が何なのかを地域住民の間で考え、どのような情報をどういった形で発信すべきかの精査を住民自身が行えるようになることが重要です。そこで、本事業では映像というツールを用いて、地域の資源や特徴を映像に記録し発信することで、地域の特徴や文化を地域外の人に紹介する一助になればと考えています。

この活動に京都府が理解して頂いた事は、本当に嬉しい限りです。京都は古い歴史に支えられ、いまでも自分たちの生活資源（文化、しきたり、様式など）を本当に大切に引き継いでいます。文化の伝承は、損得勘定を越えた意識がないと持続できません。都人の格式に支えられた京都。だからこそ京都は、日本人の古里として愛されるし、誇れるのです。人と人の距離が近い町、京都。ここから京都映像アワードは、「人が生きる姿」を追いかけます。

本事業は、＜まちの宝＞を発信するステーションです。学校教育や生涯教育、地域の PR 活動、創作活動などで利用できることも目指しています。

あなたの作品は、「未来への手紙」。きっと誰かに届くはず・・・



■広瀬之宏（ひろせ・ゆきひろ） 1952 年京都府南丹市生まれ。大阪芸術大学デザイン学科卒。クリエイティブ・ディレクター。有限会社ハーディセカンド代表。京都国際インディーズ映画祭代表。京都メディア・アート・ラボ代表。神戸女学院大学非常勤講師。広告制作、編集、出版、イベント、商品開発などのクリエイティブ活動の他、行政の地域振興計画策定、環境計画などの企画運営コンサルや障害者福祉の運営計画などに携わる。自然環境や教育、アートをテーマにした活動など多彩。美術文化展奨励賞、グッドデザイン賞、国立大学優秀広報誌表彰・最優秀賞・最優秀デザイン賞受賞など多数。現在、映像制作をはじめ自然環境とアート、教育を基軸に世界ネットのインディーズ映画の動画配信を仕掛け、ネットテレビ局・京都メディア・アート・ラボ（京都府支援事業）の事業化やデジタル教科書コンテンツの制作を進めている。著書に、点字と絵本の同時訳本「友だちがきました」、「答えは一つとは限らない」（遊タイム出版）など。

「小さな映画」の時代が始まっている

杉原賢彦 —— *SUGIHARA-Katsuhiko*

映画批評家／慶應義塾大学講師
CON-CAN ムービー・フェスティバル顧問
「まちの記憶と未来」京都映像アワード顧問

この日本にいったい、いくつくらい映画館、より正確に言えばスクリーン数があるかご存じだろうか？ 1990 年代、スクリーン数は 2000 を割り込み危機的状況が叫ばれた。その後、21 世紀以降は上昇に転じ、2010 年には 3400 スクリーン余にまで増やしてきた。

ところが、昨年、この数字がマイナスへと転じた。

原因はもちろん、東日本大震災にある。しかしまた、今後、映画が爆発的に復権するなどという見込みもない。もはや、映画館は街中のデッドスペースと化し、映画は廃れてしまうのだろうか。

いやむしろ、こう言ったほうが適切ではないか。中身の薄い、暇つぶしにしかないような娯楽映画が、なにかほかの娯楽にすり替わりつつあると。そうでなければ、〈世界の現状〉を写そうとしたドキュメンタリー映画——『ダーウィンの悪夢』や『華氏 911』などに、あれほどの注目が集まり、ヒットもしなかったはずだ。映画をどう使うか。それが、いま、問われようとしているのだ。

その答えらしきものを、ぼくは京都で見つけつつある。

京都メディア・アート・ラボの活動を通して知り合いになった KH さんの話を聞いたときのことだ。彼は農作業や農村の風景を伝えたくてデジタル・ビデオを購入したという。もちろん、農村の現場をとらえた映像はあふれるほど存在している。だが、それらのうちどれほどが、その地域に根ざしたものとして撮られ、見られているだろうか。KH さんの思いは、自分の身近にいる人たちの現実を見せたいというものだ。

地産地消という言葉があるなら、地撮地紹という言葉が無理やりつくってもいいだろう。その地と人を、その地にいる人たちにまず紹介し、そこから世界を知ってゆく……そんな小さな映画があってもいいはずだ。

京都映像アワードが目指す地点もそこにある。地域の実情を知ることから見えてくるもの、そしてそこから始まる地域活性化の時代へ。小さな映画の出番が来ている——。



■杉原賢彦（すぎはら・かつひこ） 1962 年兵庫県生まれ。映画批評家、慶應義塾大学講師。CON-CAN ムービー・フェスティバル顧問。日本フィルムアート社「シネ・レッスン」シリーズや『アートを書く！』などにおいて、映画および映画批評に関する考察を執筆。また、紀伊國屋書店発売 DVD の解説を多く手がけているほか、IVC フランス文芸 DVD シリーズの解説も執筆。それに並行して、慶應義塾大学、目白大学などで映像／映画に関する講義を担当。